

新着案内

町田の文学

第40号 2018.11.01 発行 町田市民文学館ことばらんど

寄稿

拜啓、小山田与清殿

ともきよ

浅原雄吉（小山田在住）

近ごろ、あなたのお生まれになった小山田の地を訪れる人が大層増えました。しかし、この訪問者たちの目的は、東京という大都会の静かな山間に湧き出る鶴見川の源流見たさで、残念なことに、与清殿を慕って訪れて来るわけではないのです。私たち現代人にとってあなたの成した国学の偉大な功績は、あまりに気高すぎて理解に及ばず、

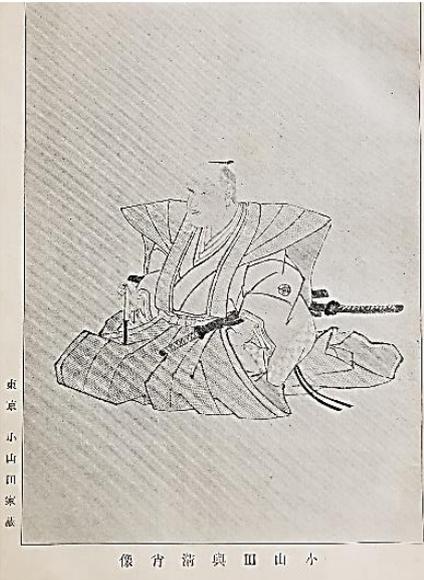
や、もするとお名前すらも薄れていこうとしていく現実を、なす術もなく見ているという現状にあるのです。



小山田与清（一七八三・天明三年～一八四七・弘化四年）は江戸期の国学者であり、優れた考証家、索引作成者でもあった。

江戸中期、与清は小山田村（現・町田市上小山田）の名主・田中忠右衛門の次男寅吉として誕生し、一九歳で江戸に出て国学者村田春海の門に入った。

父の没後、幕府通船方を務める高田家の養子となった。はじめ高田庄次郎与清、のちに小山田与清と改め、平田篤胤、伴信友とともに、江戸の三大家と称される国学者となった。



東京 小山田家蔵

小山田与清肖像

『小山田与清伝』紀淑雄
裳華房 1897年刊より

町田市民にぜひ知っておいで頂きたいのがこの小山田与清の名である。以下、補足のために与清の経歴を二書から引用しておこう。

「漢学を古屋昔陽せきやうに、国学を村田春海はるみに学ぶ。

その学は古今和漢にわたり、考証学を得意とした。…のち水戸斉昭の命により史館に出仕、また華頂宮尊超親王かちょうのみやそんちゆうしんのうのため講筵こうえんをひらき、その臣下にも加えられた」『世界大百科事典』平凡社 二〇〇五年刊)

「膨大な蔵書を駆使して古代の制度・風俗の考証に努める。化政期読書人サークルの中心人物の一人。『松屋筆記』などの多数の著書がある」『広辞苑』第六版)

与清が養子となつた高田家の土蔵「擁書倉」には三万冊あまりの蔵書を納め、のちに二万冊以上を水戸斉昭公の彰考館に寄贈したと書簡に記している。そしてこれら蔵書から独自の検索法を創案し、多くの著作を残した。その数は『国書総目録』で確認できるもので三百一点に上り、この数は『総目録』中では抜けた数字である。

与清の著書は現在、早稲田大学、東京大学の両図書館、国立国会図書館、静嘉堂文庫、町田市玉川学園にある無窮会図書館などに収まっている。加えて言えば、早稲田大学の初代学長高田早苗は与清の孫にあたり、早稲田大学図書館の収蔵はその所以と伝わる。

与清について学ぶ会を

数年前、市民文学館で与清の『翻刻 筑井紀行』(安西勝/校訂)を入手した。実は、その書に接するまで与清が町田の小山田から出た人であることを私は知らなかった。次いで安西勝氏が私家版として残された『小山田与清の探究』や町田ジャーナル社から刊行された『小山田与清年譜稿』にも接し、以来与清への思いを強くした。

安西氏の書に取りあげられた与清著作のいくつかは、明治から大正にかけて活字化され、平成になって新装版となつた『日本随筆大成』に四編収録されている。そのほとんどに目を通していたが、なぜか著者と清についてはなにも知らなかった。迂闊にも、内容にのみ心をとらわれ、著者への関心を怠つたからだつた。が、それ以前に国学への意識を欠いていたことは否めない。少し言い訳めくが、これは私に限つたことではないだろう。今日、国学や倭学に対し世間が着目しているという情報はほとんど耳にしたことがないのも事実だ。そこで考えれば、いま与清の名が薄れてしまったのは二つの理由があげられる。一つは、

急速に進んだ情報化の影響が、国学・倭学といった古く難解な学問への関心を薄れさせてしまったのではないか。もう一つは、郷土人の郷土意識離れがある。町田はすでに都会化が進み、それにつれて土着の郷土感情が住民の中に薄れていきつつあるように見受けられることだ。

相模原市緑区津久井ご出身の安西勝氏は、晩年を与清探究に情熱を注ぎ、五冊にわたる私家版研究書と年譜を残された。この大変な探究とご労苦を動機付けたのは一にも二にも氏の与清に対する情熱であることを疑う余地はないが、その根底には「筑井」すなわち郷土「津久井」への思いの強さが見てとれる。氏の心意気は私たちも学ばなければならぬことだろう。

およそ学問は、過去の言語・事象を解析し、それを未来に明りとして照らすようなものと思うが、与清の著したものは活字化されているものも限られ、すべてを知るのはまだまだ先になる。与清が未来に示そうとしたものを解き明かすには、それこそ情熱が必要なの



与清の生前刊行著作の一つである『相馬日記』(1819 文政2年刊)(町田市民文学館蔵)

●執筆者紹介
浅原雄吉(あさはら ゆうきち)
 一九四一年生まれ。「五十嵐濱藻・梅夫研究会」の一員として町田市民文学館の市民研究員制度による古俳書研究(二〇一二〜一七年度)を進め、その成果として『翻刻 八重山吹』『翻刻 草神楽』『五十嵐祇室・梅夫・浜藻来簡集』を刊行。二〇一六年には研究発表会(「五十嵐梅夫・浜藻の旅と俳諧」)も行った。町田市在住。

とは勿論だが、それを探索していくことは今後の私たち郷土人に課せられた宿題なのだろう。
 最後に私からの提案だが、いま改めて小山田与清について学び、郷土の偉人として彼の功績を顕彰する場を、町田市民文学館のご協力のもとで始めるのは如何だろうか。

町田市民文学館市民研究員制度について



町田市民文学館では、市民の自主的な文学活動を支援するため、「市民研究員制度」を設けています。

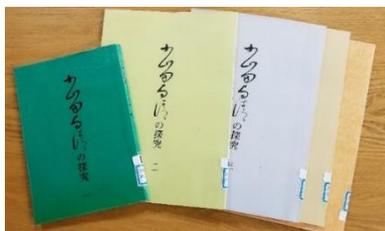
この制度は「活動の成果がより多くの市民に還元されること」を前提とし、一定の条件のもとに申請していただき、制度の目的にふさわしい研究テーマに対して、文学館として活動場所や資料提供などのサポートをさせていただく市民協働事業です。

これまで「五十嵐濱藻・梅夫研究会」「児童文学研究会」などがその成果を冊子にまとめています。

詳しい制度要項、申請書などについてのお問い合わせは文学館まで。



小山田与清を知るための参考文献



『小山田与清の探究』1～5
 安西勝／著 私家版
 1990～99年刊

そのほか、『江戸の蔵書家たち』(岡村敬二 講談社)など江戸の文人たちが活写された図書もお薦めです。

- 『小山田与清 全』紀淑雄 偉人史叢第十八巻 裳華房
- 『小山田与清伝』紀淑雄 (巻末「正誤表」付) 裳華房
- 『小山田与清年譜稿』安西勝／編 町田ジャーナル社
- 『小山田与清の探究』一～五 安西勝 私家版
- 『翻刻 筑井紀行』安西勝／校訂 町田市立図書館
- 『町田地方史研究』第五号 小島政孝／編 町田地方史研究会
- 『小山田与清と「群書搜索目録」』天野敬太郎(土 金光図書館報) 第六七号所載)

小山田与清に関する資料のうち、次のものは文学館、町田市立図書館に所蔵されています。

新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。

『三橋國民自選句集 二八年刊 閑庭に風在り』

二六年度名誉都民 名誉市民受章記念
三橋國民／著 2016 深秋

三橋國民

1920年町田生まれ。44年召集され西ニューギニアへ。帰還後は造形美術家として作品を発表し、数々の賞を受賞。2014年町田市名誉市民、東京都名誉都民の称号を受章する。18年2月没。

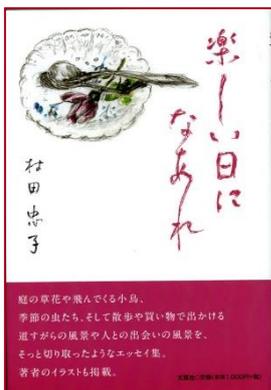
三橋國民氏の自選三十一句集。「長嶋が居て、小さく、ちつちやく、受章せり」名誉都民は長嶋茂雄氏、山田洋次氏との同時受章だったことをユーマラスに詠んだ掲句をはじめ、晩年の句、凄惨な戦争体験から生まれた句などが収められている。部隊のたった二名の生き残りとして、後半生を「鎮魂」と「平和への祈り」に生きた人の、深い生を感じさせる句集である。



裏表紙に描かれた自画像

『楽しい日になあれ』

村田忠子／著 文芸社 2018.3



村田忠子

1940年東京生まれ。「趣味は、我が家の庭造り、レース編み。動物、野鳥、植物など自然との付き合いを大切にしている」(著者略歴より)。町田市在住。

人のために何かしたいと思うが、なかなかできずにいた著者は執筆の理由を「書くことが好きな私は、本にして人に読んでもらおう。そして、もし収入でもあったら、人のために使いたいと思った」(「あとがき」より)と記す。庭の片隅に生きるカマキリへの眼差しなど、濃やかな感性で、ごく身近なものたちを温かく描いたエッセイ。

【主な寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」

詩誌：「璞（あらたま）」「構図」

短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「罨（こだま）」

「山暦（さんれき）」「都市」「風土」「波」「俳句界」

「蒼茫（そうぼう）」「八千草」

その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。

紅谷水哉子

1967年「風土」(石川桂郎主宰)入会を皮切りに「桐」、「さざなみ」「花暦」を経た、現在「天為町田支部」同人。句暦は30年近くとなり、傘寿を迎え本書を出版。町田市在住。

『鬼灯や真っ赤な嘘をつき通す』

紅谷水哉子／著 2018.7

本のタイトルのなつた句には、エピソードが添えられている。美人薄命とは何歳を言うのかと始まり、「常々夫に美人妻を持つたゆえ、一人になる確率がたかい(中略)と言ってきた」が、傘寿を迎え「後釜も用意しているのに」と夫から文句が出た。「何事にも例外と手遅れ」はあるとうそぶきつつ「私の好きな作家が主人公に『ばれない嘘は真実だ』と言わせている。とても気に入っている」。

シニカルと情熱と斬新、もつともつと読みたいと思わせる句集である。



『八十路朗人の老いの楽しみ』

井澤滋治／著
湘南社 2018.10



散文、詩文、川柳、短歌、創作歌詞、随想など、幅広い分野の作品を網羅した手のひらに乗る可愛らしい一冊。喜寿、傘寿の記念に本を出版してきた著者が米寿を前に前倒しで本書を刊行した。まさに「老いの楽しみ」が詰まった本である。

井澤滋治

1932年長崎生まれ。「ハートとユーモアで独自の文学的世界を構築し人々を魅了」(著者略歴より)。これまで『素敵な朗人をめざして』(2009年)『朗人のつぶやき』(2012年)を刊行。町田市在住。



みつはしちかこ展 —恋と、まんがと、青春と— 展覧会開催中

2018年12月24日(月・振休)まで

10:00~17:00

休館日：毎週月曜日と第2木曜日(12/24は開館)

観覧料：一般400円 65歳以上・大学生200円
(高校生以下無料)

無料観覧日：11/3(土・祝) 12/24(月・振休)

新刊紹介

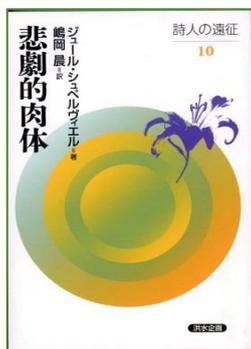
「ことばらんど春・夏・秋・冬 町田市民文学館年報 2017」

2018. 8



町田市民文学館の二〇一七年度事業報告です。本をめぐる四回の展覧会、講演会、乳幼児向け集会事業、小中学校への出張授業、市民研究会「五十嵐浜藻・梅夫研究会」の成果である『五十嵐祇室・梅夫・浜藻来簡集』の翻刻刊行、図書、雑誌、原稿をはじめとする資料収集事業などについての報告です。多彩な当館の事業について、ご理解いただける資料となっておりますので、ぜひお手に取ってご覧ください。文学館閲覧室ははじめ町田市内の図書館に所蔵されております。

町田ゆかりの作家 新着本から



『悲劇的肉体』
ジュール・シュペルヴィエール／著
嶋岡農／訳
洪水企画 2018. 7



『名もなき王国』
倉数茂／著
ポプラ社 2018. 8

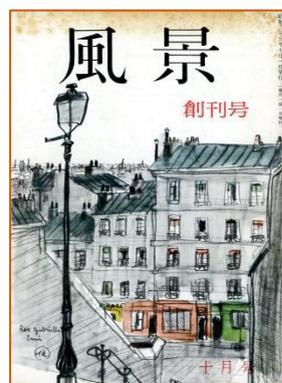


『人さらい』
翔田寛／著
小学館 2018. 9

『愛なき世界』
三浦しをん／著
中央公論新社 2018. 9



書庫の貴重図書から 文芸誌「風景」



「風景」創刊号
1960年10月号

一九六〇（昭和三五）年から七六年まで一八七巻にわたって発行された文芸誌「風景」全巻が館内閲覧の貴重雑誌として登録されました。

「風景」は、割引販売のできない書店のサービスとして、顧客に無料で配布された雑誌でした。考案したのは、紀伊国屋書店社長にして、東京の有力書店主によって結成された悠々会会長の田辺茂一、編集を担当したのは、当時大流行作家だった舟橋聖一を中心とする作家が結成した「キアラの会」でした。

「キアラの会」には、野口富士男、三島由紀夫、豊田三郎、船山馨、北

條誠、八木義徳をはじめとする錚々たる作家たちが参集し、野口、八木、吉行淳之介らが交代で編集長を務めました。

執筆陣は当時の大家、川端康成、武者小路実篤から井上靖、大江健三郎、遠藤周作（当時町田市在住）などの人気作家、さらには中上健次、立松和平などの新人まで、多彩な顔ぶれでした。

また当時めづらしかった作家同士の対談、例えば「谷崎潤一郎×円地文子」（一九六一年一〇月号）なども人気のコーナーだったと言います。

町田ゆかりの作家である八木義徳も七〇年四月号から七一年五月号、



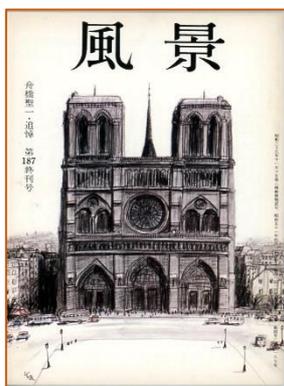
「風景」川端康成氏追悼
1972年6月号

七五年一月号から一二月号までの二回編集長を務めました。

八木はその頃の思い出を新宿歴史博物館特別展図録「田辺茂一と新宿文化の担い手たち」（九五五年）の巻頭インタビューで語っています。当時すでに多くの関係者が物故者となり、「風景」の時代を語れるただ一人の人となっていました。

「風景」は、舟橋の死をもって七六年に終刊となりますが、日本文学の一時代を画する雑誌として大変貴重なものです。

館内閲覧となりますが、初冬の日、昭和にさかのぼる文学の旅はいかがでしょうか。



「風景」舟橋聖一・追悼
第187号
1976年4月号

ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。



文豪たちの 自筆原稿

「産経新聞」掲載記事から

ミニ展示シリーズ第四弾は、市民の方からご寄贈いただいた文豪たちの自筆資料をご紹介します。

これらは全て、「産経新聞」に掲載された記事の原稿です。ご寄贈くださった方は、産経新聞社で校閲のお仕事をなさっていた関係でこれらの資料を所蔵されていたとのこと。貴重な資料から、作家たちの息遣いを感じていただければと思います。

◆展示日程◆

10月23日～11月7日

遠藤周作 三島由紀夫

11月9日～11月25日

壺井栄 幸田文 田中澄江

11月27日～12月12日

五味康祐 丹羽文雄

山手樹一郎

12月14日～12月28日

井上友一郎 串田孫一

2018年度お宝紹介スケジュール（予定）

展示中～12/28 文豪たちの自筆原稿～「産経新聞」掲載記事から

2019/1/4～3/17 街頭紙芝居

「町田の文学」第40号 2018年11月1日発行

編集・発行／町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 町田市原町田 4-16-17 TEL 042(739)3420

FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター

Twitter@machida_kotoba



*この冊子は300部作成し、1部あたりの単価は326円です(職員の人件費を含みます)